



高根棚田耕作状況 調査結果報告書

～ 現状と将来の耕作予測 棚田マップの作成 ～

目次

1	ご挨拶	2
2	調査の概要	4
3	団地位置図	6
4	耕作状況調査結果－全体－	7
5	耕作状況調査結果－団地ごと－	12
6	稲作農家アンケート調査結果	27
7	調査参加者の感想	30
8	調査を終えて	31
9	これから	32

1

ご挨拶

一般社団法人 高根コミュニティラボわあら
代表理事 遠山 真治

先ずはじめに、この度、皆様の御支援、御協力を受けトヨタ財団 2017 年度国内助成プログラムを受けて実施いたしました「高根棚田耕作状況調査結果報告書」が、無事完成しましたことをご報告するとともに、厚く御礼申し上げます。

この報告書は現在、高齢化率 39%、人口約 590 人の、都市部から遠く離れた新潟県と山形県の境に位置する山間の高根集落が、どのように人口減少や更なる高齢化に対して対応していけるかを考え、議論する為、データ収集の一環としてトヨタ財団「しらべる助成」の協力を得て、高根の棚田にスポットをあてた調査をさせていただきました。

なぜ棚田かと申しますと、高根集落では依然、農業従事者とその関係者等が少なからずおり、また農業関係で支払われる補助金も有ります。この為、もし棚田の耕作が行われなくなった場合、様々な形で会社員等の非農業従事者にも直結して関係してくる事となり、高根集落の自治運営にも響いてくるのではと考えます。

まさに農業従事者以外、関係のない話ではなく、集落全体の問題となりますので、この調査結果をもとに、また皆様と議論をし、高根の未来を考えていく場を設けていきたいと思えます。その際は御面倒とは存じますが御協力、御指導のほどよろしく願いいたします。

末尾になりますが、農繁期にアンケート、状況調査にご協力いただいた各農家様に重ねて御礼申し上げたいと思えます。

棚田調査を終えて、次代へつなぐ棚田を考える

高根活性化委員会

委員長 遠山 眞佐美

当地域の棚田は、昭和 40 年代までは形も様々。1 枚の面積がとても小さい田んぼが、山の斜面に重なり合い形成されていました。昭和 50 年代に行われた土地改良区画整理により今の形に作り直され、このとき整理されなかった田んぼには杉を植林するなどして、多くは森林へ変わっていきました。

この頃までは“結い”により田植え作業が行われていましたが、区画整理により機械が田んぼに入るようになり、トラクター、田植え機、コンバインと機械化が進み、手作業が少なくなったことで、結いの形はなくなりました。しかし、水路は長いところで 3 km 以上になるところもあり、共同作業でなければ維持できない状況は変わりありません。そうした中で、米価の下落、集落の過疎高齢化が進んできているのは他の地域と同様です。条件の悪い場所については減反をするようになり、棚田の荒廃が進んでいます。

今回トヨタ財団の助成金を活用して『一般社団法人高根コミュニティラボあら』が約 10 年前の調査について、再度調査していただけたことは、今後の棚田維持、集落維持と活性化を考える上では大変ありがたいものとなりました。約 10 年前の調査では、現在の棚田と比べると、もっと大幅に荒廃が進むとみられていましたが、60～70 代になる米農家の方々の頑張りがあったからこそ、今の状況で留まることができたのだと思います。

しかしながら、この調査結果から、これからの 10 年が最も厳しい状況になるものと感じています。調査を十分に検証し、地域でもう一度話し合い、自分たちの食料は自分たちで賄いながら、棚田を維持することでの環境保全という、上流域に住むものとしての責務を果たせるよう、地域全体で考えていきたいと思っています。

今回の調査を時間のない中で分かりやすくまとめた貴団体、財源提供とご協力いただいたトヨタ財団に厚く御礼申し上げます。

2

調査の概要

目的	本調査では、約 1,300 枚ある高根の棚田が現在どの程度耕作されているか状況を把握するとともに、年齢、後継者の有無などの要素から、10 年後に耕作されているかどうかの予測を行う。2008 年に「共存の森ネットワーク」が調査した情報と照らし合わせ、耕作状況の変化について把握し、棚田での米作りを継続するための課題や対策を検討する。
調査期間	2017 年 5 月～9 月
調査対象	高根地内の田
調査方法	棚田の水系ごとにまとまっている団地それぞれ、聞き取り調査を行う。団地の特徴や課題について記録し、棚田地図に現在の耕作状況、10 年後の耕作予測、耕作者年代を田んぼ 1 枚ずつ色分けする。色塗りされた田んぼ枚数の集計・分析を行う。
調査状況	全 14 団地に聞き取り調査を行った。 調査実施：3 回 話し手：延べ 18 名参加 聞き手：延べ 47 名参加（高根：24 名 高根外：23 名）

棚田耕作状況調査の手引き

●調査の目的
2008 年に共存の森ネットワークで行った棚田調査。それから 9 年が経ち、今棚田がどのような状況になっているのかを確認するとともに、10 年後の耕作状況を予測し、今後、高根の棚田を守っていくために自分たちに何が出来るかを考えます。

●調査方法
① 棚田の団地ごとに分かれて、記録係（1 人）と色塗り係（複数人）を決めてください。
② 調査シートに話し手と聞き手の名前を書いてください。
③ 田んぼ 1 枚ずつ、今お米を作っているか、10 年後作っているかを聞いて色塗ります。

現在の状況	
緑	耕作している
赤	耕作していない
茶	減反している

10 年後の予測	
緑	耕作を継続できる
赤	継続は困難
黄	どちらともいえない

④ 色塗りしながら、調査シートにある団地の特徴を聞いて、記入して下さい。

●色塗りの仕方
田んぼ 1 枚の左側を現状、右側を 10 年後として色分けをします。

現在の状況	10 年後の子測		現在の状況	10 年後の子測
-------	----------	--	-------	----------

(現在耕作している・10 年後継続は困難) (現在耕作している・10 年後継続できる)

調査シート

団地名：	広さ：	耕作軒数：	軒	耕作者年齢：
聞き手：	話し手：			

水路の状況 (距離・種類・管理状況・水量他)	
獣害	あり・なし(動物名：)
田んぼの状況 (田の広さ・機械の出入りしやすさ他)	
v 土質 (乾田・湿田・深さ・水はけ他)	
畦 (広さ・草刈りしやすさ他)	
団地の良いところ	
団地の悪いところ	
今後 10 年間で想定される課題	
その他	

第1回聞き取り調査

実施日：2017年5月20日（土）19時30分～21時

参加者：田んぼ関係者10名・高根14名・地域外13名



第2回聞き取り調査

実施日：2017年6月17日（土）19時30分～21時

参加者：田んぼ関係者6名・高根6名・地域外10名



追加聞き取り調査

実施日：2017年7月25日（火）19時30分～22時

参加者：田んぼ関係者2名・高根4名



3

団地位置図

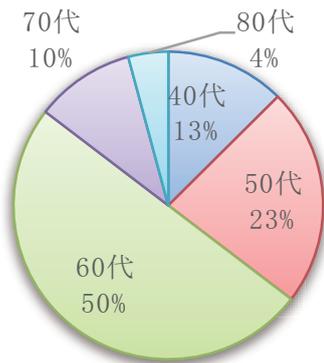


4 耕作状況調査結果 — 全体 —

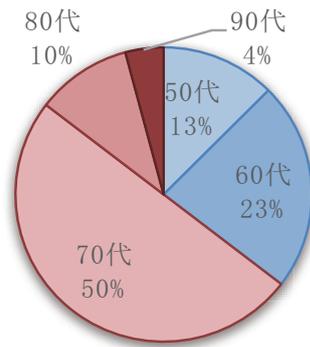
農家の年代

■ 農家年代構成

今現在、稲作農家は48軒ある。70代以上は14%（7軒）。現在の農家の年代構成を見ると70代、80代になると一気に減少することが分かる。10年後、70代になる現在60代50%（24軒）に後継ぎがいない場合、水路管理などの負担は、現在の40代・50代36%（17軒）にかかってくると予測される。



現在（2017年）



10年後は…

■ 年代別 耕作枚数割合

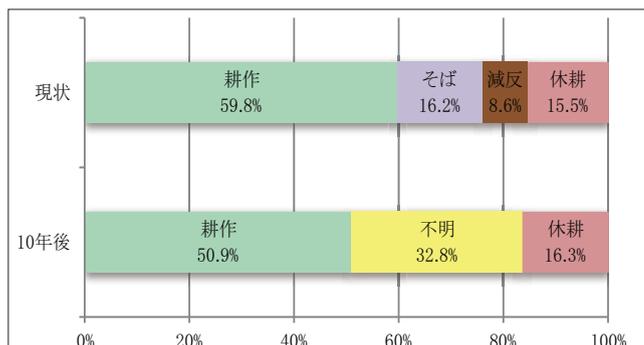
耕作されている田の合計枚数を農家軒数で割り、農家1軒あたりの平均耕作枚数を計算すると1軒あたり15.4枚耕作となる。

右のグラフは、耕作されている田んぼの、耕作者年代構成を表している。60代以上が全体の58.5%を担っている。今耕作している50代以下のみで今の状況を維持するためには、1軒あたり43.4枚（現在の2.3倍）の田を耕作する計算になる。



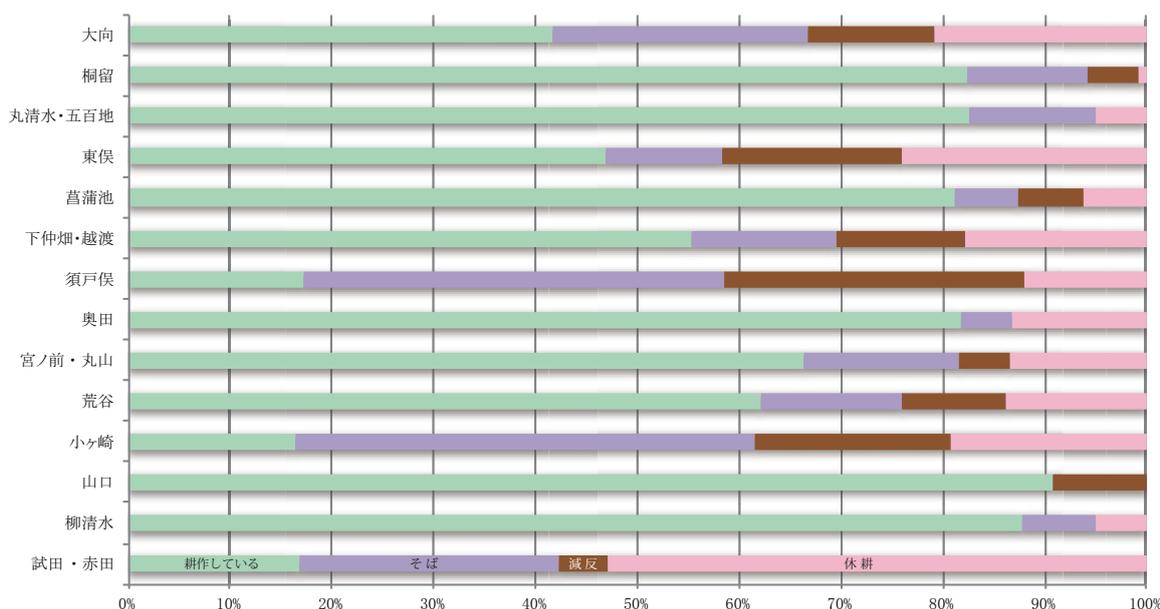
■ 棚田全体の耕作状況と10年後予測

現在、棚田全体の59.8%は耕作されているが、10年後には50.9%（-8.9%）になると予測されている。



現在の耕作状況について

高根の棚田を14団地に分け、団地ごとに棚田の耕作状況を聞き取りした。農地とされている部分に関して色分けし、田の枚数で耕作率を出した。その結果、団地ごとに、耕作率のばらつきがはっきりと表れた。耕作している割合が高い団地は、日当たりや土質など田としての条件が良く、水路の管理もしやすいところが多い。逆に、条件の悪い団地はそば栽培や減反対象となり、田として米をつくる機能を持たないところが増えてきている。



	試田・赤田	柳清水	山口	小ヶ崎	荒谷	宮ノ前・丸山	奥田	須戸俣	下仲畑・越渡	菖蒲池	東俣	丸清水・五百地	桐留	大向
■耕作している	16.9%	87.7%	90.7%	16.4%	62.1%	66.3%	81.7%	17.2%	55.3%	81.3%	46.9%	82.5%	82.4%	41.7%
■そば	25.3%	7.4%	0.0%	45.2%	13.8%	15.3%	5.0%	41.4%	14.2%	6.3%	11.5%	12.5%	11.8%	25.0%
■減反	4.8%	0.0%	9.3%	19.2%	10.3%	4.9%	0.0%	29.3%	12.6%	6.3%	17.7%	0.0%	5.0%	12.5%
■休耕	53.0%	4.9%	0.0%	19.2%	13.8%	13.5%	13.3%	12.1%	17.9%	6.3%	24.0%	5.0%	0.8%	20.8%

■ 団地ごとの耕作率ランキング（現在耕作している割合が高い順）

順位	団地名	2017年耕作率
1	山口	90.7%
2	柳清水	87.7%
3	丸清水・五百地	82.5%
4	桐留	82.4%
5	奥田	81.7%
6	菖蒲池	81.3%
7	宮ノ前・丸山	66.3%

順位	団地名	2017年耕作率
8	荒谷	62.1%
9	下仲畑・越渡	55.3%
10	東俣	46.9%
11	大向	41.7%
12	須戸俣	17.2%
13	試田・赤田	16.9%
14	小ヶ崎	16.4%

10年後の耕作率予測について

農家の高齢化や後継者不足に伴い耕作地の減少が予測される他、耕作しているか分からないという回答が多かった。団地ごとに耕作率の差が大きく表れは、徐々に条件の良い団地に耕作が集約されていく可能性が見えてきている。



■ 団地ごとの耕作率予測ランキング

(10年後耕作している可能性が高い順)

順位	団地名	2017年耕作率	2027年耕作率予測	順位	団地名	2017年耕作率	2027年耕作率予測
1	山口	90.7%	90.7%	8	荒谷	62.1%	44.8%
2	柳清水	87.7%	87.7%	9	試田・赤田	16.9%	16.9%
3	丸清水・五百地	82.5%	82.5%	10	小ヶ崎	16.4%	16.4%
4	奥田	81.7%	81.7%	11	須戸俣	17.2%	5.2%
5	桐留	82.4%	80.7%	12	東俣	46.9%	1%
6	宮ノ前・丸山	66.3%	63.2%	13	菖蒲池	81.3%	0%
7	下仲畑・越渡	55.3%	48.9%	14	大向	41.7%	0%

2008年調査との比較

9年前、2008年に調査した耕作率と今回の調査データを比較し、どの程度の差があったのかを数値にした。大きく差が出た団地とそうではないところがはっきりと分かれる結果となった。

■ 2008年データとの比較

	耕作率変化※ (2008年耕作率－ 今回の耕作率)	耕作予測比較※2 (2018年耕作率予測－ 今回の耕作率)
試田・赤田	-65.2%	-18.2%
柳清水	-9.7%	-3.3%
山口	-5.0%	0.0%
小ヶ崎	-69.7%	-29.2%
荒谷	-24.0%	16.5%
宮ノ前・丸山	-20.1%	-6.5%
奥田	-4.4%	36.1%
須戸俣	-41.6%	-33.8%
下仲畑・越渡	-26.8%	20.2%
菖蒲池	-18.7%	-13.7%
東俣	-13.4%	5.5%
丸清水・五百地	-0.2%	-0.2%
桐留	-0.4%	8.8%
大向	-55.1%	41.7%

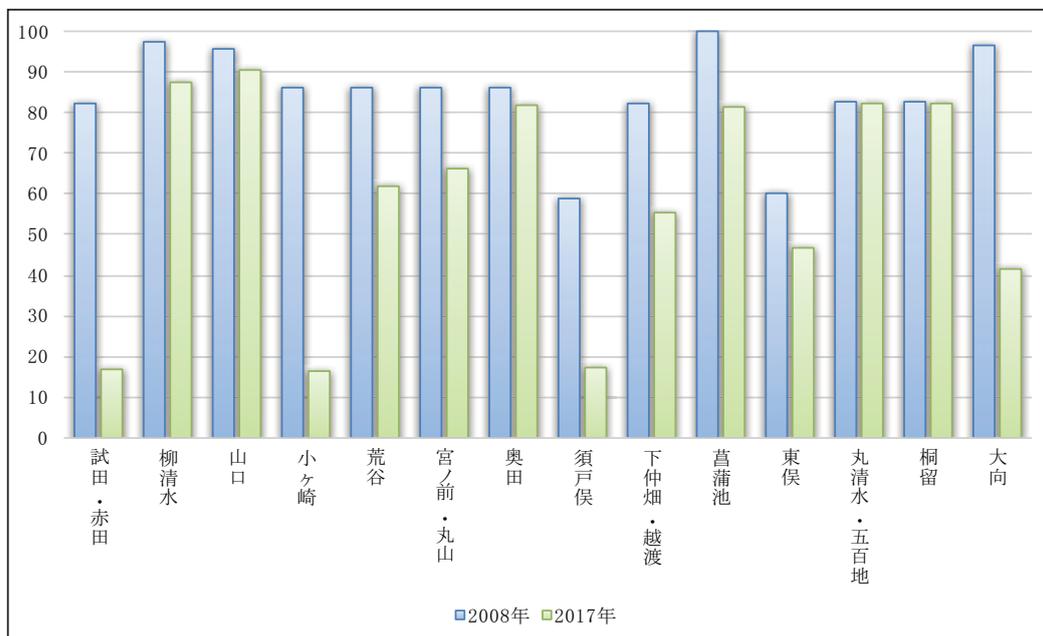
※ 赤字：差が大きい団地トップ3 / 青字：差が少ない団地トップ3

※2 赤字：予測より悪い団地トップ3 / 青字：予測より良い団地トップ3

■ 耕作率変化数値ランキング

順位	団地名	耕作率変化 (2008年耕作率－ 今回の耕作率)
1	丸清水・五百地	-0.2%
2	桐留	-0.4%
3	奥田	-4.4%
4	山口	-5.0%
5	柳清水	-9.7%
6	東俣	-13.4%
7	菖蒲池	-18.7%
8	宮ノ前・丸山	-20.1%
9	荒谷	-24.0%
10	下仲畑・越渡	-26.8%
11	須戸俣	-41.6%
12	大向	-55.1%
13	試田・赤田	-65.2%
14	小ヶ崎	-69.7%

■ 2008年調査耕作率と今回の耕作率の比較

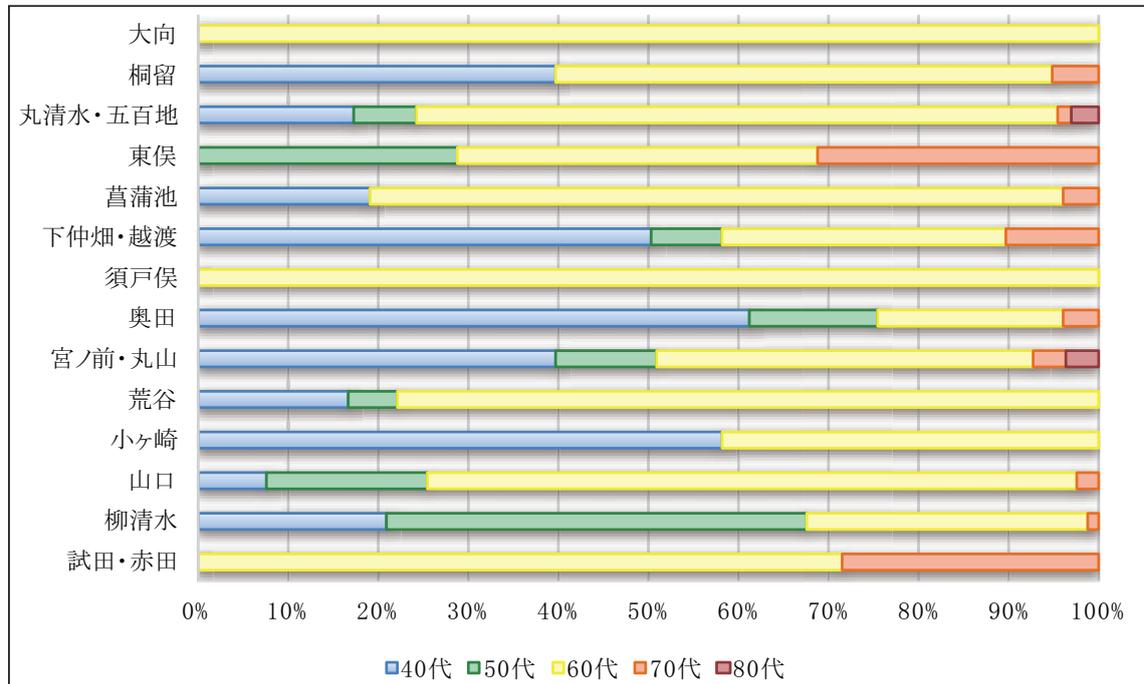


団地ごとの耕作者年代構成について

団地ごとに耕作者の年代構成割合を出したところ、50代以下が極端に少ない団地がいくつか浮かび上がってきた。10年後、団地を維持していくことが難しくなる可能性が高いと予測できる。

【50代以下が少ない団地】 試田・山口・荒谷・須戸俣・菖蒲池・東俣・丸清水・大向

■ 現在の耕作者年代構成（各年代別）



■ 現在の耕作者年代構成（50代以下と60代以上の割合）

